2013 年度　第 6 回　協働実践研究会　報告

2013 年 11 月 23 日(土)、東京海洋大学において、第 6 回協働実践研究会および日本語教育における協働学習実践研究シンポジウムが開催されました。今回は、通常の研究発表に加えて、日本語教育における協働学習の実践・研究のアジア連携を可能にするプラットホーム構築をテーマに、韓国、中国、台湾、モンゴル、インドネシア、タイから多数の先生方を招聘し、ポスター発表、各国の協働実践の取り組みの報告、パネルディスカッションなど、盛り沢山な内容でした。

午前中は口頭研究発表が 4 つ、午後からはポスター発表が 7 つ、その後、休憩をはさんで、東京海洋大学長岡本信明先生のご挨拶の後、池田玲子先生（東京海洋大学）のプロジェクト立ち上げの経緯・目的の説明、アジア 6 か国からの協働学習の実践報告とパネルディスカッションが行われました。以下、順を追って報告させていただきます。

1. 口頭発表

①揚姍燁(台湾　銘伝大学)「学習者の立場から見たピア・レスポンスの有効性についての一考察―台湾の日本語学習者を対象として―」

②趙冬茜(早稲田大学大学院)「協働学習に対する意識調査―教師と学習者の対照を中心に―」

③趙宣映(韓国　培材大学)「基礎日本語におけるピア・ラーニングの可能性―教養科目としての授業において―」

④孫雪嬌・クラスナイいづみ・平澤栄子・道端輝子・山下佳恵(早稲田大学大学院)「協同で読むとは何か―協働でテキストを読む実践で生まれた実習生の葛藤から―」

口頭発表の様子

活発な質疑応答

最初の発表者、揚姍燁さんは、学習者の立場からピア・レスポンスの有効性を考察すべきだという考えに立ち、グラウンデッド・セオリー・アプローチによって、ピア・レスポンスに対する学習者の評価について分析されました。その結果「グループの組み方」「話し

合う対象の活動への影響」「活動への評価」「活動における特別な経験」「学習者の活動での反応」「活動へのアドバイス」という 6 つのカテゴリーに分けられることがわかりました。肯定的票だけではなく、グループ編成については「くじで決める」という要望や活動を通して「日本語能力の向上」「ロジック能力の養成」「人間関係づくり」に役立つ反面「同レベルの人とピアを組んだ場合、助言の仕方がわからず雑談になりやすい」といったマイナス評価も生じていました。フロアーからは、ピア・レスポンスの流れや活動に関して具体的なアドバイスを与えるために、評価基準を明示することや、相手からのレスポンスがこないことを問題視するのではなく、お互いレスポンスを引き出すためにはどうすればいいかという点を考える必要があるのではないかというコメントがありました。

次は、趙冬茜さんの協働学習に関する認識調査に関する発表でした。先行研究から、これまで協働学習は、教授法として認識し学習者の成績、グループ分けのスキルなどに注目が集まる研究がある一方で、学習者の思考深化、学習観、教育観の変容などにも着目してきましたが、中国では、どんな協働学習が必要なのかということがわからないまま議論されているのではないかということを問題提起されました。そこで、日本語教師と日本語学習者に、協働学習の頻度、学習者の成績向上、学習者の個人要素、評価体系（自己評価、相互評価、教師評価)、教室外の協働に関するアンケート調査が行われました。

その結果、教師は学習者より協働学習に対して肯定的な評価を持っていました。教師は普段実際の授業ではあまり使わない、あるいは、成績の低い学習者はグループで何もしないという印象をもっていることがわかりました。これに対し、学習者は、日本語能力の低い学習者も協働学習に貢献しているという認識を持っていました。フロアーからは、このような意識調査をどのように教室活動に反映したらよいかということが議論になりました。学習者の中には、実際発言していない学習者も存在しますが、その参加度を調べてみると、必ずしも参加していないわけではないことが、内省シートから示唆されています。それを次の授業で取り上げる、あるいは、今後、質的にインタビューで出すと興味深いのではないかという意見も出ました。また、協働学習を、学生の側はどう受け止めているのかという質問に対して、発表者から、楽だから、楽しいからという理由も存在しているが、自分の説明を通して、自分の学習や理解につながると考えていることがうかがえ、今後も、学習者の受け止め方に関する考察を続けていきたいということでした。

三番目の発表者は趙宣映さんです。教養科目としての基礎日本語の授業にピア・ラーニングを導入し、初級のクラスにピア・ラーニングが可能なのかどうかを探るために、学習者の認識の調査がなされました。その背景には、対象者が様々な専攻の学生で、レベル差（0～N1）が大きく、さらに人数が多いという学生に対してどのように動機づけを高めていくかという問題がありました。また、企業の人事課からの要望で、協働ができる人材の育成が急務だと感じられたことです。ピア・ラーニングの試みとして、グループで声を出していっしょに読む、学習した表現による文章作り、教科書の本文の韓国語訳と言う活動がなされ、学生のピア・ラーニングに対する評価を、4 段階評価で答えてもらいました。

その中で、発表者にとって最も懸念された、教えてあげる側の学生にとってピア・活動が役に立ったのかという問いに対して、上のレベルの学生も肯定的評価をしており、授業への積極的活用、レベルの差の活用が示唆されています。自由叙述で特に注目されるところは、学習者同士で、教師には聞けない、しらないところが聞けた、集中できたなど、情意的な面で役に立ったことが指摘されています。

フロアからは、3 つの試みの中で、訳をつけるタスクの点数が高かったのは、訳を通して、自身の世界がよく出せた、自分たちのコミュニティー作りがなされたのではないかというコメントが出されました。また、大学卒業後、企業が求める人材としても、協働していく力が求められていることやレベル差があるところでピア・ラーニングを試みる意義についても再確認されました。

最後の発表はクラスナイいづみさん、孫雪嬌さん、平澤栄子さん、道端輝子さん、山下佳恵さんの共同発表でした。早稲田大学大学院日本語教育研究科の実践研究科目の一つである「クリティカル・リーディング」という中級レベルを対象としたクラスで、発表者は実習生として、協働で授業を行うと同時に、読み手として教室活動に参加しました。本研究は、実習で生まれた葛藤から協働の意味を問い直すという点に主眼が置かれました。実践者は、協働で読むということを、一つの正しい答えを見出すことではなく、なぜそのような答えに至ったのかという理解のプロセスを重視することだと捉えました。そのプロセスを通して、自分の考えが更新されたり、多角的な視点が養われていくことではないかと考えるようになりました。

フロアからは授業としての評価、達成目標との関連をどのように考えたらいいかという問題が提起されました。担当者から、この実践が自分の考えが更新され深まっていくことにその人の成果があるとするならば、学習プロセスを評価する必要があるとし、教室活動の他、作文、タスクシートを提出させ、参加重視の考え方をとってきたという報告がありました。しかし、さらに、学習者にとっては日本語が伸びたかどうかを評価していかないと達成感が持ちにくいので、教室活動の最初と最後の変化についても、今後見ていく必要があると述べられました。また、他の参加者からは、人数が多い中で、一人一人の参加度を評価するのはむずかしいが、最終的に、自己表現力との関わりが実感できればいいのではないかという意見も出されました。

2. ポスター発表

午後からは招聘の先生方による「海外における協働学習」をテーマに、中国から 2 点、台湾 2 点、インドネシア、モンゴル、韓国からそれぞれ 1 点ずつのポスター発表がありました。

①王文賢（中国海洋大学・中国）「中国の大学における入門期学習者による協働学習」

②劉娜（大連外国語大学・中国）、穆紅（大連理工大学・中国）「大連日本語教師が協働学習実践に対する意識―協働学習研修会の参加者を対象に―」

③倉持香（弘益大学校・韓国）「韓国における日本語教育機関での協働学習」
④荒井智子（銘伝大学・台湾）「『中等教育機関日本語教師研修会』からの報告―書くことへの指導（話し合って、書き出そう）―」
⑤張喻珊（新生医護管理専科学校・台湾）「台湾の五年生専門学校の作文授業の試み」
⑥フランキーナヨアン（マナド国立大学・インドネシア）「インドネシアにおける協働学習―ピア・フィードバックを取り入れた音声教育―」
⑦ツルバートル・オノン（モンゴル国立大学・モンゴル）「ピア・リーディングを取り入れた社会人向けの読解授業の試み―」

王文賢さんは、中国の大学における入門期の協働学習として、「みんなの日本語Ⅰ」の授業のすべての練習をペア・ワークで行い、授業終了後に学習者と担当教師にアンケート調査を行いました。その結果、学習者からは「日本語学習の意欲が高まった」「パートナーからよい刺激を受けた」などの回答が得られました。一方、担当教師からは、出席率や発音の向上が見られ、教室学習者間の距離が縮まり積極的な質問につながったことなどがあげられました。

劉娜さんの発表では、日系企業が集中する大連では日本語専攻を新設する大学が多いという現状の中で、学習者の主体性の育成のために、今後、現場の日本語教師と協働学習実践を共有していきたいと述べていました。2013 年 10 月に行われた質問調査では、大連の日本語教師のほとんどは学習者の言語能力の向上を目指す一方で、協働学習に対する期待が多いことがわかりました。しかし、具体的な実施の仕方がわからず不安や心配が多いという認識があることが明らかになりました。情報交換や協働学習活動の体験、学習者の反応を踏まえた実践の改善の必要があると考えられます。

倉持香さんは、韓国における日本語教育の全体像を紹介されました。2011 年から 2013 年までの約 2 年間に 30 本の論文が発表されています。ほとんどは大学での実践研究であり、中・高等教育機関での研究はあまり進んでいないので、これらの教師に対する協働学習導入への積極的な働きかけが必要であると考えられます。一方、韓国ならではの研究も増えつつあり、HID プログラム、タンデム学習法、サイバー講義、ネット掲示板や SNS を利用した協働学習の実践も紹介されました。

荒井智子さんからは台湾の「中等教育機関日本語教師研修会」についての報告がなされました。研修会では「書くこと」に関して教師と学習者が抱いているそれぞれの悩みについて取り上げられたのちに、ピア・レスポンスの概念を紹介しワークショップが 2 つ行われました。その中で、主体的な活動や気づき、実際の授業への応用の可能性に対する肯定的な評価があることがわかり、読み手の存在を意識することや活動プロセスの可視化などを意識した授業づくりの必要性も認識されました。台湾の中等教育における第二外国語として、日本語は人気科目ですが、教師数の不足、教材・教授法の情報の不足、学習者の日本語学習に対する動機づけなどの問題も指摘されました。

張喻珊さんは台湾の五年生専門学校応用日本語学科二年生の作文授業に協働学習を取り入れ、「計画」「実行」「評価」「改善」というサイクルの中で授業をふり返った実践報告がなされました。上半期の授業をふり返って、作文を書く際の「書く目的」の欠如が明示的となりました。学習者からは、仲間と討論することに対する肯定的な評価はありましたが、「コメントがありすぎてどう直せばいいか混乱」「わかっていてもどう直すかわからない」などの感想もあり、今後の課題となりました。

フランキーナヨアンさんの発表は、インドネシアにおけるピア・フィードバックを取り入れた音声教育についてでした。インドネシアでは、音声教育があまり行われていないという現状があります。それは、教師自身が発音、アクセントに自信がないということに起因していると思われます。そこで、音声専門の教師でなくても音声教育ができる方法の検討として、ピア・フィードバックを音声教育に取り入れ、学生にとってお互いにモニターできるという活動を試みました。ピア活動の効果は顕著ではありませんでしたが、今後も、イントネーションなどを入れ練習方法を改善したり、ピア・フィードバックによる縦断的な変化を見るためのデータを収集し、教育方法の改善、効果の実証をしていくことの必要性が示唆されました。

ツルバートル・オノンさんの発表は、モンゴルの読解教育にピア・リーディングを取り入れることによって、自分のフォーマルスキーマを意識化し、読解力の向上に寄与できると考えられました。ピア・リーディングによって、自分が読んで感じたこと、考えたことを他の人と話し合うことで、新しいことに気づき、さらに深く理解できるようになる、また、読むものの目的や種類に合わせて読み方を変えることができるようになることをめざし、モンゴル的な読解文化と日本的な読解文化を臨機応変に使い分けられるようになる試みが行われています。

3. パネルセッション

「日本語教育における協働学習の実践・研究のアジア連携を可能にするプラットホーム構築」(研究代表者 池田玲子)の趣旨説明の後、アジア 6 か国から、それぞれの国における協働学習の実践および研究報告がありました。

①中国からの報告（林洪　北京師範大学／朱桂栄　北京外国語大学)
②韓国からの報告（金志宣　梨花女子大学校)
③台湾からの報告（羅暁勤　銘伝大学)
④モンゴルからの報告（ナイダン・バヤルマ　モンゴル国立教育大学)
⑤タイからの報告（スニーラット二ャンジャローンスック　タマサート大学)
⑥インドネシアからの報告（ディニブディアニ　リアウ大学)

大講義室が一杯に

開催校の岡本学長によるご挨拶

各国の報告の前に、金孝卿さん（国際交流基金シドニー）日本語教育の全体像についての報告があり、日本語教育の広がりの中で、それぞれの国や地域の事情や政策を基に、教師の実践や悩みを共有するネットワークづくりの重要性が述べられました。

林さんからは、まず、中国の CNIK のデータから中国の協働学習研究の現状が報告され、さらに、現場教師が抱える問題や協働学習研究のための概論書が紹介されました。中国の全体的な傾向としては、2002 年から教育改革が行われる中で、大学よりも小中学校の協働学習の研究が多いという特徴があるそうです。現場の教師の抱える問題としては、日本語の言葉の運用がまだ足りないこと、時間のコントロールがうまくできないことなどがあり学習の目的を明確にすること、限られた時間内での実現性を考え工夫すること、授業とのつながりや評価の問題を考えることなどの必要性が述べられました。

朱桂栄さんからは、北京協働実践研究の活動報告がありました。中国の日本語教師の参加を確保することが難しいという現状の中で、授業見学、教育現場への理解を通して、教師は何を求めているか、授業の流れの中で協働学習をどのように取り入れていくか、実施後どのように受け止めているかを観察、記録しながら、協働学習を推進していくことの重要性が述べられました。

金志宣さんからは、韓国の研究会の活動報告がありました。月 1 回の勉強会と食事会が行われており、文献購読や講演会、ワークショップ、それぞれの実践の報告などがなされています。これらの活動を通して、協働学習に対する知識が深まり、主体的に学び合えることや、それぞれの実践報告や話し合いを通して、授業の問題解決の糸口を見出していること、実践研究会の外へも発信し、研究会の実践報告が学会での研究発表や論文に仕上げられることもめざしています。しかし、授業で協働学習に積極的でない学生に対する対処、評価方法、教師の役割など、今後の課題に向けて、仲間同士のネットワークづくりを密にし、実現可能な協働学習の追究を強調されました。

羅暁勤さんからは台湾の協働学習研究についての報告がありました。HyRead から Peer をキーワードとして協働実践研究を検索したところ、160 本ありました。学術誌に刊行した論文は合計で 16 本あったそうです。昨今、台湾においても協働学習が注目を集めていることが如実に表れています。これまで協働実践研究会の活動は 5 回行われ、文献解読、研修

活動などが実施されました。その後活動が個別的になってしまったので、今後少人数でも活動を持続的に行い、台湾における協働実践研究を広げていきたいとのことです。

バヤルマさんからはモンゴルの活動と現状、問題点が報告されました。モンゴル協働実践研究は 3 年前に発足しました。今年の研修会では、日本語教師のみではなく、英語、ロシア語中国語の教師も対象にしたことで意義のある研究会になったそうです。現在毎月一回行われ、前半は理論研究、後半は実践報告と言う形で行われています。今後参加メンバーを増やすための働きかけ、あるいは他の外国語の教師とどのように連携をとっていくか検討しているとのことです。

スニーラットニャンジャローンスックさんからはタイの日本語教育における協働学習実践研究の現状と問題点の報告がありました。タイの教育は教師主導の指導法で進められてきましたが、2009 年からタイの教育改革では学習者中心教育の具体的な研修会が行われています。発表者自身もピア・リーディング活動を取り入れ、学生の学習観の変化の可能性を実感しています。これまで協働学習についての授業実践は日本人教師が中心となっているのが現状ですが、今後はもっと幅広い教育者の参加が望まれています。

最後はインドネシアの日本語教育における協働学習についてディニ・ブディアニさんからの報告です。現在インドネシアの日本語学習者は 80 万人を超え中国に、次ぐ学習者数ですが、協働学習に関する研究や実践報告などはまだ少ないと言えます。発表者は作文教育にピア活動を取り入れ、学習者の認識を調査した結果、学習者の多くは、ピア活動を通じて「内容」「構成」「読み手への配慮」「言語知識」の点で改善されたと述べていました。今後は、今まで行ってきた研究成果を高校の日本語教師にも広め、協働学習に関するワークショップを開き、ネットワークを広げていきたいと述べられました。

4. 全体討論（パネルディスカッション）

（パネルディスカッションでのパネリストとフロアとの議論）

以上 6 つの地域のからの報告の後、パネルディスカッションが行われました。舘岡先生より 2 つの論点:①アジア諸国の教育のスタイルと協働学習の葛藤、②今後の研修会、勉強

会の在り方についての問題が提示され、パネリスト、フロアー双方から活発な議論が行われました。

アジア文化圏における協働学習を考える際に、最初やりにくさは存在するが、教師は活動のための枠を作っておく、また、なぜこの活動をさせるのかという目標を明確にし、事前に協働学習について説明する必要性がのべられました。その際、積極的に参加できている学生とあまり積極的でない学生の間で、不平等なディスカッションになっているのではないかという意見が出されましたが、役割を与えることやタスクシートの配布、事前課題の設定や教師の見回りなど、実際の取り組みが報告されました。また、それぞれの参加者がその人らしさを担保していればいいのではないかという意見も出ました。

さらに、果たして、これはアジア、非アジアという問題なのかという点に議論がおよび、むしろ、アジア、非アジアという分け方ではなく、メンバーとどのように場を作っていくのかということが重要ではないかという意見が述べられました。また、教師が前に出ることのよさもあるので、学習者、教師のコンビネーションでやっていくことと同時に、実証研究を丹念に続けていくことの必要性が述べられました。

予定終了時間を大幅に超えてしまったため、今後の研修会やネットワークづくりについては、それぞれの地域のリーダーを核として、研究会を充実させていくことを確認したにとどまりました。全体を通して、内容が濃く、非常に充実した研究会であったことをご報告させていただきます。

（文責：原田三千代）